

見て感じて語る 大相撲テレビ観戦雑記  
平成 25 年 11 月場所を終えて

30 年余り前、福岡に住んでいる頃の実感、「大相撲 11 月場所が終わると冬が来る」。町中を歩く力士達の鬘付け油が匂うようになると 11 月、そして中日を過ぎる頃から冷たさを感じるようになる。そして千秋楽が近付くにつれて玄界灘からの風が強く吹くようになり、時には雪が舞うこともある。そして、相撲が終わると、町も家々も正月の支度が始まり、柳橋の市場が賑わって来る。季節を体で感じる 11 月場所だった。今場所も様々なドラマがあり、様々な問題があり、そして様々な課題を残して終わった。

### <1> 千秋楽結びの一番相星決戦

東西横綱による千秋楽結びの一番での相星対決という素晴らしい終わり方になった。全勝で並走してきた両横綱は、13 日目（日馬富士）・14 日目（白鵬）ともに二差で追う稀勢の里に敗れてしまったため、全勝対決こそ実現できなかったが、興業としてはかなりの盛り上がりで幕を引く形になった。

ここまでは良かったのだが、この横綱同士の迫力あるぶつかり合いの最中に大事件が起きてしまった。

日馬富士の寄り身をこらえる白鵬が俵の外に足を踏み出してしまい、行司の静止によって勝負が終わると言う珍事が発生した。夢中で戦う両力士はそれには気付かず、行司が土俵上の白鵬が踏み出した場所を指して勝敗の決着を示したが、勝ち名乗りを受けた日馬富士は驚きの顔つき。白鵬に至っては、何事が起きたのかと茫然自失の表情だった。会場の観客には事の顛末がさらにわからなかったようだった。このような場合には、勝負審判による観客への説明があっても良いのではないかと思った。

深く割れた低い腰の位置、鋭く曲がった膝、動いた軌跡が見事にわかる摺り足、白鵬の相撲には安定感があり、相手に動かされても臨機応変の素早い対応もあり、全勝優勝を予感した。ところが、稀勢の里戦ではそれを上回る速さで突っ込んできた大関に得意の左上手を許してしまった。そして土俵際での得意の下手投げに賭けたものの、わずかな体の開きの差で稀勢の里の上手投げに屈した。一般論としては、下手投げと上手投げの打ち合いになった時には、上手の方が優位であると言われているが、柔らかな足腰と粘りのある体を持つ白鵬は上手に勝る下手投げを持ち、これまでに得意技にもなっていた。僅かな自信が仇となった油断の一番ではなかろうかと推察した。

勝ち名乗りを受ける稀勢の里、立ちつくす白鵬の背後に、観客席から湧きあがった無礼とも思える万歳三唱。これは少々観客のマナーを疑いたくなるような光景だった。

復調なった（と言われる）日馬富士は、初日から彼本来の「低く鋭い」「突き刺さるような立ち合い」が光っていた。しかし 13 日目までの白鵬の相撲はそれを上回るものだったので、私の目には白鵬の優勝のイメージの方が強かった。日馬富士には申し訳ないが、白鵬の僅かな油断と心の乱れが勝因だったのではないかと見ている。

無礼な一言のついでに、私が抱く懸念として「来場所 8 勝 7 敗はないよな?」、言いすぎかな。

### <2> 稀勢の里の活躍そして大関は・・・

稀勢の里の相撲には落ち着きがあった。常に相手に前進圧力をかけてはいるが、慌てて突っ込むことなく、冷静に対処しているのが目立った。若干腰を落とした状態で相手の動きを見ながら動いていたが、その間も体全体としては常に前に圧力がかかっており、相手陣地での寄り身が目立った。表情にも落ち着きが伺え、ことによると・・・と思わせたが、負けなくても良い二敗をしてしまった。これまでの稀勢の里だと、二敗した時点で我を見失ってしまうところだが、今場所は「心」の安定が柱になっていると感じた。

とは言っても、元来の腰高は修正のしようもない。白鵬や妙義龍などの低い腰の構えの力士との比較してみるとよくわかる。仕切りの最中でも、立ち合いの姿勢や攻めている段階でも、膝の角度が 90 度以下にはならない。重心位置が高い所にあることがすべてに影響しているように感じる。それでも低い位置を作ろうとすると前かがみになるしかなく、それが叩かれる原因にもなる。これが一番の課題・問題点だとみているが、もう直らないかもしれない。克服する術は「上手狙い」を止めて「前みつねらい」に切り替えることで

はないかと見ているが如何に。

### <3> 北の湖理事長の場所中の発言に不快感

稀勢の里が二敗目を喫した時には、「これで綱取り論議はなしだろうな」というような発言。

13日目に日馬富士を破った時には、「13勝2敗なら準優勝扱いで、来場所の綱取りはあるだろう」との発言。理事長の要職にある者が、場所中にこのような発言をすることには違和感がある。一般企業で、社長が「山田君の役員への昇格はこれで消えたね」とか「山田君があと500億売り上げを伸ばしてくれたら昇格だね」などと公言することはあるだろうか。

こんな上司の下では働きたくないと思うのが普通のような気がする。理事長や審判部長あたりまでがマスコミの御神輿に乗って「綱取りだ、綱取りだ」と囃し立てるのは不愉快な感じがする。騒ぎ立てるマスコミを諫めて、少しでも稀勢の里が実力を発揮しやすい環境を作ってやるのが本来の勤めではないかと思うが。琴欧洲、琴奨菊と休場が続いた所へ最後の一人琴勇輝までが球場になり、佐渡ヶ嶽部屋の関取は全滅の状態になった。五人いた大関が一人減り、二人目の琴欧洲は怪我の程度から見て復帰は難しいことが明らかになった。また、そんなさなか、日本国籍取得に動き始めたことが報道されたので、かなりの重症なのかもしれない。私は予てより五大関は多すぎると見ていたが、どうやら落ち着くべき所へ向かいつつあるような感じになって来た。「大関リストラ論」は一旦引込めることとするが、抜本的対策としての「昇格基準と降格基準の見直し」が必須であることには変わりはない。

### <4> そんな中で大関候補は・・・

東の関脇豪栄道は「大関への第一歩」と騒がれたが、8勝7敗に終わった。前半5日間の相撲を見る限り勝ち越してきかどうかというような怪しげな相撲だった。先場所見せた鋭い立ち合いと寄り身、素早い身のこなしは影を潜め、バタバタしながら辛うじて星をあげているような状態で、マスコミの騒ぎとはまるで異次元にいるようだった。単なる精神的な問題ではなく、立ち合いの踏み込みや機敏な動きができないような(どこかの)不具合をかかえているように感じられた。

一方の西の関脇栃煌山も自分の形に持って行けなければ惨めな負け方をするという「彼本来の癖」が露呈し、7勝8敗に終わった。小結は毎場所入れ替わる慌ただしい状態で、次世代を担う力士の登場はまだまだ先になりそうである。

### <5> 話題になった力士達

新入幕力士は常に騒がれるが、特に何らかの特色を持っている力士はなおさらのことである。大砂嵐はエジプト出身で、しかも最速の入幕と騒がれた。立ち合いの両手(もろて)突きとどの輪攻めは威力があるが、四つに組んだ後は棒立ちのままで取る相撲、横から掴むまわし、力任せの振り回しなど基本を無視した粗雑乱暴な相撲は、恐らく怪我の元となるだろうと思う。把瑠都の二の舞とならぬようにと祈りたい。

相撲の基本をきちんとマスターしていると言う点で将来有望とみられている遠藤は、先場所の足首の怪我が完治しておらず、勝ち越すことはできなかった。時々見せる下がりながらの投げが気になるが、前に圧力をかけながらとる相撲に拘って行けば、身に付いた基本が生きて大成への道を歩むことだろう。

場所毎にわずかずつ進化を見せていた勢は、今場所さらに大きく飛躍した。右四つの形になると力を発揮する上に、右四つになる過程が早くなったような気がする。また、右四つになれない時には離れても相撲が取れるので幅があって良い。立ち合いの鋭さが増して、今場所はかなりの進化を感じさせた。今場所は敢闘賞を受賞したが、将来は妙義龍と並んで技能賞を狙える器に育つであろう。

千代大龍は場所前に両目の緑内障の手術を受けたばかり、とのことで衆目は不安視していたが、蓋を開けて見たら鋭い立ち合いから繰り出す突き・押しが光った。11勝4敗は見事な出来栄で技能賞を得たが、敢闘賞かなという気もした。糖尿病を抱えているとの報道を見たことがあるが、糖尿病→緑内障とつながって考えて見ると危険な香りがしないでもない。

### <6> 十両以下も面白い

今場所は十両の優勝争いが面白かった。九重部屋の千代鳳・千代皇・千代丸が軸になり、里山・鏡桜が加わり、千秋楽に向かって絞り込まれていく過程が興味深かった。九重部屋の全力士が好調で十両全体を牽引している感じがした。

幕下以下の各段の優勝にも特徴があった。幕下優勝の土佐豊を筆頭に、怪我で転落した力士たちが復活を期しての優勝だったのは面白い結末だった。

以上

<付録資料>

主要力士の仕切りの姿勢比較  
(平成 25 年九州場所千秋楽の土俵から)

<p>(左) 富士東 (右) 遠藤</p>		<p>遠藤の鋭角に曲がる膝 富士東との腰の高さの差に注目</p>
<p>(左) 妙義龍 (右) 臥牙丸</p>		<p>妙義龍のかなり鋭く曲がった膝と 低い腰の位置 臥牙丸の膝は 90 度以上</p>
<p>(左) 碧山 (右) 隠岐の海</p>		<p>碧山の曲がらない膝は 100 度位か？ 隠岐の海は長身ながらここまで曲がるが、立ち上がってからが腰高</p>
<p>(左) 稀勢の里 (右) 鶴竜</p>		<p>稀勢の里の膝の角度は通常 95 度位だが この日は鶴竜を意識してか 90 度 でもこれ以上は曲がることはない 鶴竜の方が腰の位置がずっと低い</p>
<p>(左) 白鵬 (右) 日馬富士</p>		<p>両横綱はともに膝の曲がった低い姿勢 白鵬の方が僅かに低い腰の構え 日馬富士は体を丸めて 今にも突進できる仕切り</p>
<p>(左) 白鵬 (右) 日馬富士  立ち合いの瞬間</p>		<p>白鵬の腰は深く沈みこんでから伸びるように 飛び出す 日馬富士はやや立ち遅れているように見えるが 体を縮めて一気に伸び出す</p>